

青森県の 市町村 情報



佐井村

佐井村ミニデータ

- 人口 1,933人
(男970人、女963人)
- 世帯数 943世帯
(令和2年7月31日現在)
- 特産品
ウニをはじめとする海産物や、マメ科の食物・アピオスのほか、ヒバ製品や仏ヶ浦裂き織りなどがある。

【概況】「まさかり半島」といわれる青森県下北半島の西部に位置し、津軽海峡と山々に囲まれ、海岸線沿いに8つの集落、山間部に1集落が点在。7つの港を有し、漁業が盛ん。仏ヶ浦や願掛岩、縫道石山などの観光資源にも恵まれている。

佐井村発★キラリ

各市町村で活躍するグループ・団体・企業等を紹介します。今回は『矢越青年団』をご紹介します。代表の宮川修平さんやメンバーの皆さんにお話を伺いました。



▲代表の宮川さん（後列左から2人目）とメンバーの皆さん。新型コロナウイルス感染症対策として、地区54世帯にマスク1箱ずつを配布。子どもがいる世帯には子ども用マスクも配り、若い世代の視点を地域活動に生かしています。

再結成で若い世代が 地区を盛り上げる

矢越青年団は2018年2月、十数年ぶりに再結成されました。現在のメンバーは20〜30代の男性6人、女性4人で、様々な地域活動を展開しています。

団長の宮川修平さんは「私たちの父母世代は、男女分け隔てなく仲良く話ができているけれど、自分たちの世代にはそのような交流はありませんでした」と青年団結成前を振り返ります。「将来、自分たちが地区を担っていく時に、父母世代のように、よい雰囲気や活動できるように、男女と一緒に活動したいと思いました。昔は青年団で女性も活動していたため、青年団を復活させ、若い世代が連携して地区を盛り上げていきたいと考えました」と再結成の理由を話します。

再結成後、地区の海岸清掃に参加したり、地区の春祭り芸能発表会でカラオケや踊りを披露するなど、活発に地域活動を行ってきました。また、2018年夏には、「子どもが雨や吹雪の日も外でバスを待っている状況を何とかしよう」とバス

の待合所を設置しました。2019年夏には、老人クラブと子どもたちに声を掛け、夕涼み会を開催し、多世代交流も深めています。

男性も女性も 「矢越らしく」「楽しく」活動

メンバーたちは役場や企業、団体などで働いており、子育て中の人もいますが、活動が「楽しい」と口を揃えます。館脇美樹さんは「多くの人と関わりたいと思い、入りました。春祭り芸能発表会の出し物など、楽しんでやっています。地区を歩けば、『今年はやんねえんだか?』と声を掛けられ、年々、観客も増えていると思います」と話し、交流の広がりを感じているようです。

また、宮川志穂さんは、「出し物は、最初は恥ずかしいと思ったけれど、いざやってみると、はまるというか、いいものだなって思いました。仕事や子育てに追われがちの中で、練習でみんなと話しているだけで楽しいです」と語り、忙しい中でも活動が息抜きになっているそうです。

宮川団長は「横も縦もつながりがあって、押し付けではなく、先輩たちは下の世代の意見を聞いてくれます。アットホームで、笑いが絶えないのが矢越地区です。矢越らしさを大切に、楽しいと思える活動、長く続けられる活動を展開していきたいです」と抱負を述べ、「女性目線の意見を言うってもらうことで地域はよくなっていくと思います。だから一緒に盛り上げていきます」と力を込めていました。

私が男女共同参画を 担当しています

佐井村総合戦略課
主事
間山 貢樹 さん



佐井村では2011年10月、佐井村男女共同参画社会基本計画を策定し、地域における男女共同参画の推進を目指してきました。最近の大きな取り組みとしては、昨夏、村が主催した「日本で最も美しい村世界女性サミット」が挙げられます。

佐井村は、地域の自然や伝統文化などを守りながら自立や発展を目指すNPO法人「日本で最も美しい村」連合に2016年10月に加盟し、産官民で2030年の村のあるべき姿を「日本で最も小さくかわいい漁村」とする、村づくりビジョンを策定しました。また、ビジョン実現に向け28のアクションプランを掲げ、プロジェクトチームを発足し、ビーチクリーン作戦やクラフトビルづくりを目指したホップ栽培など様々なチャレンジに取り組んでいるところです。

女性サミットは、このアクションプランの一つで、東北地方の加盟町村・地域の女性16名が参加しました。講演や視察、体験などを通して、参加者が意見交換をし、「ゆるゆるとつながりながら、女性の立場で美しい村の理想像の実現に向け行動する」との宣言をまとめました。

矢越青年団の活動は、年齢や性別に関わらず、人がつながって、地区を盛り上げており、率直にすごいと思います。村の人口が2千人を切り、男性が女性かではなく協力しなければいけない局面でもあります。佐井村男女共同参画基本計画の更新の時期を迎えるので、次の10年に向け、さらに良くなるよう取り組みたいです。

(取材：大畑 彩美)